

移民と階層編入

～中国朝鮮族のトランスナショナルな生活と階層分化から～

The Reorganization of Social Stratification and Migration:

Transnational Life and Social Stratification of Koreans from China

金 英花 (宇都宮大学)

KIM, YongHwa(Utsunomiya University)

キーワード：移民、中国朝鮮族、階層分化

1. 研究目的と研究背景

2018年8月現在、在韓朝鮮族の数は717,383人であり、帰化者を含めるとその数は80万人を超える。(出入国・外国人政策本部)。1990年代から本格的に始まった中国朝鮮族のコリアンドリームも変化を重ね、2000年初頭まではお金を稼いで本国中国の故郷に錦を飾ることだとすれば、その後の約15年間は受け入れ社会、韓国社会の階層に編入しながら定着していく新コリアンドリームともいえる。出稼ぎ1世代の大多数が低熟練労働者として、韓国社会の下層として組み込まれていたとすれば、朝鮮族移民2世、3世には高学歴者の進出により多次元な職業群の出現という現実が広げられている。その背景には、韓国政府の規制から緩和へ、拒絶から受入へ、管理から包容という受け入れ制度の変遷がある(金、2014)。韓国社会で朝鮮族は低熟練労働者というイメージが強いが、新階層への編入を果たした人たちはそれぞれどのような経験を経て、韓国社会での地位達成を果たしているのか、国際移動という経験が朝鮮族の階層分化にどのような影響を与えたか。本研究は、移住先からみた移民の階層編入という視点(竹ノ下、2012)から、中国朝鮮族の1990年以降の階層分化の過程と韓国社会での階層編入はどのように行われているのかをその背景となる諸制度と「跨境」民族としての彼らのトランスナショナルな生活に注目しながら説明することを目指す。

2. 研究方法

韓国ソウルと中国延辺で収集した資料とインタビューをもとに考察する。韓国では中国朝鮮族の密集地域である九老区加里峰洞、永登浦区大林洞、中国では主に延辺の龍井市で調査を行った。インタビューの対象者は、在韓朝鮮族6人(主に移民二世)、民間支援機関の担当者2人、政府関係者1人、教育関係者2人で、計11人である。調査期間は、2016年6月から2017年12月にかけて現地で実施した。当事者である6人については、全体的な階層集団を念頭に置いて、それに沿って自営業者、大学教員、ポスト出稼ぎ者、サラリーマン、低熟練労働者など、それぞれ違う職層の人を選ぶように心掛けた。彼らがどのような過程を経てその職層に編入されるようになったか、受け入れ政策、エスニック・コミュニティ、家族関係、社会関係資本などを中心に聞いた。東アジアにおける移民と階層にかかわる問題は、これまでその比較的浅い歴史や人口比率の低さを理由にして移民、外国人、民族的マイノリティをめぐる問題は階層研究の範疇として注目されてこなかった。また、朝鮮族のトランスナショナルな生活が持つダイナミズムによって、限られた事例で全体的な説明ができるかという課題も残っている。しかし、全体の大きな動きの中で実際の階層達成が個人レベルでどのように行われているかについて明らかにすることは、彼らがそれぞれの階層の事例として韓国社会にどのように編入していくかを考察する上で根拠となる資料として十分提示の意義があると考えられる。移民が階層化された労働市場のどのセクターに組み込まれているのかは、受け入れ社会の文脈を構成する重要な課題でもあり、今後の移民政策を模索することにもつながると確信する。

3. 階級から階層へ、下層から多次元の階層へ

朝鮮族は中国の少数民族の一つとして、かつ、中国公民として少数民族集居地を中心に生活してきた。1978年の改革開放の路線が打ち出されるまでは、社会主義体制という公式イデオロギーの下で、中国社会の「階級論」に基づく労働者、農民の二つの階級と、一つの階層(知識人)によって区分されていた。しかし、1990年代冷戦体制の崩壊と東アジアの経済交流の深化過程で境界人としてのエスニックスキルを効率的に活用して多様な形態で資本を蓄積しはじめた。これは既存の階級構造だけでは解明できなくなり、社会的威信や収入の異なる職業が社会階層を序列づけ、産業社会が人々の職業間の社会移動を伴わせることで、開かれた階層社会をもたらすなどの考え方がより身近に感じられるようになった。この時期の二つの大きな変化として大量の人口移動と生活範囲の拡大がある。韓国へ移動した朝鮮族は在外同胞としての地位を獲得できなかった2000年前半までは、送り出し国である中国での元の職業や地位に関係なく、移動先韓国では単純労働に従事する不法の外国人労働者として社会の下層に位置付けられた。在韓朝鮮族の職業分布を正確に把握するのは難しい。申告率が56.3%にすぎないが、2010年の移住同胞政策研究所の資料によれば、就業資格ビザで入国した人296,592人のうち、職業開始申告者166,971人の業種は、製造業が34.7%、飲食サービス業が31.2%、建設業23.5%、家庭内雇用3.9%の順であることが分かった。本研究では、在韓朝鮮族の階層を既存の論議と調査に基づいて4つの範疇として類型化する。大きく分けてA) エリート、高学歴知識人の集団、B) 中小自営業者の集団、C) 零細自営業者の集団、D) 低熟練業種集団である。A) は、出稼ぎ1世代の経済的支援を受け、留学と教育を通じて韓国社会で地位達成を遂げた2世、3世で主に大学、研究所、大企業、公的機関、マスコミなどの知識人層を形成している。B) は、比較的早期に韓国に移動した人たちで、韓国に関する情報に詳しく、エスニック・コミュニティを中心に経済的基盤を築いた集団で、Aとともに、「在韓朝鮮族の成功物語」の主人公として近年継続的にマスコミの注目を浴びている。C) は、エスニック・コミュニティ、または外国人居住地域で遅れて自営業を始めたが、運営が厳しく開業と廃業を繰り返しながら中国と韓国を行き来する人たちである。D) は、過半数を占める単純労働(製造、建設、住み込み家事手伝い、看病人)の従事者である。また、この集団には、制度的制約上、韓国での長期滞在はできなく、親の稼ぎで中国と韓国を行き来する19歳から25歳までの潜在的なポスト出稼ぎ層も含まれる。上記の4つの集団ともに多く見られるのが(特にD集団にその傾向が強い)、中韓両地域に異なる階層を持っているケースである。

4. 結論

朝鮮族の国内外への移動と階層分化は同時に行われたと言っても過言ではない。韓国社会での彼らの階層分化は、受け入れ制度の変遷のもとでスタートしたが、制度的制約条件の中、個々の集団は、まず、エスニック・コミュニティ内での自営業への職業移動を通じて地位達成を行ってきた。次に、親世代の経済的な支援と親世代の韓国での社会関係資本に頼って世代間移動を果たし、世代内移動も果たしていた。三番目に、それでもなお、全体的に依然として単純労働の数は多く、トランスナショナルな移動をしながら、受け入れ国である韓国では低い階層、送り出し国である中国では経済的に優位な位置という別の社会で異なる階層を通して補っている人たちも多数存在するということが見えてきた。「学歴社会」韓国で朝鮮族の地位向上と3D労働者というイメージを払拭するにはまだまだ遠くて、長い道のりが予想される。

*付記：本研究は、JSPS 科研費(16KT0180)の助成を受けたものです。

【主な参考文献】

- ・竹ノ下弘久(2012)「社会階層をめぐる制度と移民労働者：欧米の研究動向と日本の現状」、『三田社会学』第17号、pp79-85
- ・金英花(2014)「中国朝鮮族の国際的な移動と子どもの教育：出稼ぎの変容と留守児童の問題から見る家族生活」、宇都宮大学国際学研究所博士論文
- ・韓国出入国・外国人政策本部 2018年統計月報
- ・移住同胞政策研究所(2010)『外国籍同胞就業実態と就業支援強化方案』、韓国産業人力公団
- ・Portes and Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*. =村井、他 訳、2014、『現代アメリカ移民第二世代の研究：移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店